

安珍は、出立の準備を整えてから、寝床に横になった。けれど……なかなか眠れない。

月が……明るい……。

いろいろな思いが、次々と襲って来て……眠る事が出来ない。

誰かが入って来た気配を感じて、安珍は眼を開けた。

部屋の中に、白い影がぼっと立っている。

……清姫だ……清姫は、淡い桃色の襦袢を着て、枕を抱えている。

清姫は、泣いている……。

「どうした……姫」

少し驚き、身体を起しながら安珍は聞いた。

「安珍が行ってしまうと思うと、寂しくて……悲しくて……安珍……今晚は、せめて、安珍の布団の中で……寝かせてもらったら、ダメ？」

安珍は、戸惑う……清姫は、自分の言っている事がわかっているのか？

「姫……姫様のような娘が、

男の寝所に入って来ては

いけないですよ……。」

清姫は、安珍の前に、

くつつくように座り込む。

「なぜ……私は、寂しくなったら、お父様の寝床に入れてもらう……。」

お父様も、男だ……。」

やれやれ……やっぱり、清姫は意味がわかっていない……。

「今日は、安珍の側で寝たい。……そうしたら、少しでも、寂しさがまぎれる気がする。」

安珍は、居ずまいを正して、清姫の前に正座をする。

「だめですよ。姫……自分の部屋でお休みなさい。」

安珍は、すこし強い口調で、清姫をやさしく諭す。

「どうしてもダメ？」

